子どもたちに伝える～がん教育
日本対がん協会の取り組み

2015年5月

公益財団法人日本対がん協会

経緯

2009年末 「がん教育基金」

※中川恵一・東大病院准教授の助言

2010年　出前授業「ドクタービジット」（共催・朝日新聞）

DVD「がんちゃんの冒険」制作

（東日本大震災・・・予定した授業が中止に）

2011年10月　横浜雙葉高校で実施（最初）

～13年度　計16校（中学6　高校9　専門学校1）

（※朝日新聞の企画記事として紹介）

14年度　文科省・モデル事業を民間側からサポート

（6校）

文藻女高等學校

13年度の1例

31 13版　2014年(平成26年)1月12日　日曜日　毎日新聞

調べ合い 一緒に考える

ドクターズ・ナビ　がんを知る

@奈良県立大淀高校　文化祭で成果発表

医療系への思い、より深く

発表の3カ月前 生徒たちが聞いた講義

予防・検診の意識高めよう

向原徹　神戸大特命准教授

「がん教育」が患者を減らす

中川恵一　東大医学部准教授

がんについて習ったことがありますか。

公益財団法人
日本対がん協会

http://www.jcancerc.jp/

奈良県立大淀高校
1年生の1クラス

内容：がん全般
講義後にGワーク
「自分たちの街から
がんで苦しむ人を減らす」
夏休みの宿題
秋の文化祭で発表

第3種郵便物認可

生きること 考えるきっかけに

ドクタービジット

がんを知る @東京・暁星中学校

かけがえのない「いのち」について考えて欲しい——。学校現場に医師や専門家を派遣して授業をする「ドクタービジット」（日本対がん協会、朝日新聞社主催）が10月22日、東京都千代田区の暁星中学校（勝部純明校長）でありました。2年生173人が、がんとはそもそもどんな病気なのか、家族や自分ががんにならないためにどうしたらいいのかを真剣に考えました。

「がんの6割は予防できる」

東京大准教授 中川 恵一さん

がんの検診についての知識を教えたのは、東京大学医学部の中川恵一准教授（53）。暁星学出身で、在学中の写真も見せながら、後輩たちに、がんについて説明した。

「がん家系という言葉があるけれど、家系によるがんは全体の5%で、あくまで例外なんだよ」。がんは、遺伝子に傷がついてできる病気であり、原因の半分以上は、たばこと生活習慣であると話した。「6割くらいのがんは、予防できるんです」

そして、「がんになっても早期のがんは9割は治ります」。がんは長い時間をかけて大きくなるが、がんの種類によっては進行が速い。「だから大人になったら、1年から2年ごとに検診を受けて欲しいんです」と続けた。

この後、NPO法人「両南いのちを考える会」（山口県下松市）代表の前川育さん（65）が経験談を披露。続く2時限目は、2人がトークを交えながら、生徒たちとワークショップ。

中川さんが「がんになって良かったことってありましたか？」と、前川さんに意外な質問。前川さんは「以前は人前で話すのが苦手。でも、がんで一度死んだと思って、病気のことを話せるようになりました」。

その言葉を受けて中川さんは「自分が死ぬことって普段は考えないよね。でもがんでも、そしてがんが治っても、人はいつか死ぬ。がんは死と、そして生きることについて考えるきっかけをくれるものかもしれない」。

ワークショップでは生徒たちに紙が配られた。「おじいさん、お母さん、だれでも自分の大切な人の好きなところを紙に書いてみて」「その人がいなくなってしまったら、と目を閉じて考えを巡らせた。

教室後、中川さんは「その大切な人や自分ががんにならないために、自分に何が出来るだろう」と問いかけた。

生徒たちの意見は「検査をしっかり受ける。そして周りにもそうすれば早くみつけられると伝える」「週末に足を野菜不足にならないように気をつける」など、授業の成果がうかがえた。「神様に祈る」「お守りをあげる」といった声も。

質疑応答では、「どうして人は、死という恐怖があるのに生きないといけないんですか」という問いが。

中川さんは、「君は自分のためだけに生きるんだろうか。生きていて周りに世の中にどう貢献するのかということを考えてみては」と答えた。

生徒に声を掛ける中川恵一さん（左）と、がん経験者の前川育さん＝東京都千代田区、松本敏之撮影

「限りある命、二度とないこの時間」

長男亡くし自分も3回克服 前川 育さん

「私は子どもをがんでなくしています。そして私自身も3回がんになりました。でも、今こんなに元気です」

がん体験者の前川さんは、そう話を始めた。

1985年、前川さんの長男は4歳で急性骨髄芽白血病と診断され、医師に「治療法はない」と言われた。今の治療では80%がん細胞が根絶できないが「奇跡」となるが、当時はまだ「不治の病」だった。

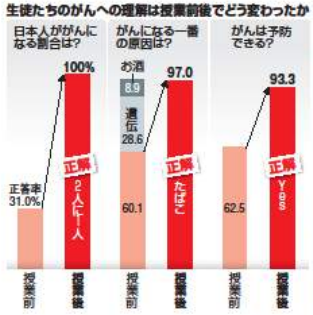
「それまでは本当に普通の生活で。それがどんなに幸せで、どんなに貴重だったかということに気がついたのです」と振り返る。

長男が入院した病院や医師は詳しい説明をしないままに抗がん剤治療を始めるなど、配慮を感じられず、別の病院に転院。そこでは痛い検査も工夫があり、夜になると医師も子どもたちと一緒に遊んでくれた。そして、つらい治療に耐えた意子がいた。

抗がん剤の副作用で髪が抜け、ステロイドの影響で、顔が丸くむくんだ長男の写真を見せながら「6歳4カ月で亡くなる2年の間、とても苦しんだと思います。一時退院したときには、乗りたがっていた飛行機に初めて乗り、本当にうれしそうでした」と振り返った。

長男が亡くなった後、前川さんは喪失感に襲われたが、次女が生まれ、再び幸せを感じる」という声があった。新DVDは11分に短縮。どの部分からでも見られるようにして使いやすくした。

来年3月ごろを目標に完成させ、希望者に配布するほか、同協会のウェブサイトなどでダウンロードできるようにする予定だ。



「教養としてのがん教育」めざして

がんの教育に関する検討委委員長

植田 誠治さん

国のがん対策を進めるために2012年6月に閣議決定された第2期「がん対策推進基本計画」は、子どものがん教育の推進を盛り込んだ。これを受けて文科省は今年、「がんの教育に関する検討委員会」を日本学校保健会に設置。委員長の植田誠治・聖心女子大学文学部教授（教育学）に聞いた。

◇

検討委員会では、学校教育のなかで、がん教育はどう採り入れられるべきか、どのような目標を立てればよいか、どういう内容にするべきかといった基本について、ゼロから慎重に話し合っています。

現在の学校教育でも、がんについて全く取り扱っていないというわけではありません。保健や保健体育の授業で、生活行動と病気、生活習慣病との関係で出てきます。また、高校では医療体制を学ぶときに、検診など予防についても取り扱っています。ただ、「がん」というまとまりとしては取り扱っていません。

日本人の死因のトップであることや2人に1人はがんになる、といった基礎的な知識、そして検診などの予防の大切さを、国民の教養として学校教育に採り入れることは非常に意義のあることだと思います。

全国の小、中、高校でそれぞれ2千～3千人に意識調査をしたところ、がんについて「怖い」「どちらかと言えば怖い」という回答がいずれも80%以上ありました。検診に関しても「病気になってから受けるもの」といった誤解も見られました。

学校教育でがんをきちんと教えることで、このような不ポジティブな意識を払拭でき、検診などの予防行動につながるのではないかと期待しています。

やはり保健体育がひとつのベースになるでしょう。学習指導要領できちんと位置づけていく必要があると思います。

ただ、がんの知識だけではなく、命の大切さや、「がんと共に生きる社会」といった視点も必要でしょう。そこは総合的学習の時間や道徳などで押さえていくことができるかも知れません。その場合には、学校の教師だけでなく地域で活動されている医師やがんの経験者らの協力があれば、大いに活用して頂くことも考えられます。

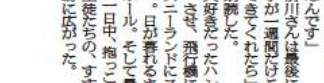
検討会には、医師や看護師、養護教諭、そして地域の医師会や患者会の方が委員として参加しています。それぞれの立場から意見を出してもらっています。

授業として成立するには、学習の目標や内容を明確に定めないといけません。それが決まってこそ、教材も選ぶことができます。

難しいのは、小、中、高校と子どもの発達段階に合わせて、どのような内容を取り扱うか。本当の意味で子どもたちにがんの知識を定着させるためにも、工夫な議論が必要だろうと思っています。（聞き手・杉浦隼）

がん教材用DVD新版 短く使いやすく

日本対がん協会は、新しいがん啓発DVDを制作中だ。「がんって、なに？　いのちを考える授業」がタイトル。今回のドクタービジットでパイロット版として初めて放映され、授業の教材に使われた。



がんの基礎知識、治療法、早期発見と検診の大切さ、緩和ケアなどについてアニメーションでまとめられている。

同協会では以前から「がんちゃんの冒険」という教材用のDVDを配布していらっしゃ、こちらは全部で27分あり「授業で使うには長す

出前授業 がん学ぶ

神戸の塩屋中生 山王病院の奥仲氏から

医学の専門家による出前授業「ドクタービジット」（朝日新聞社、日本対がん協会主催）が12日、神戸市垂水区の市立塩屋中学校で開かれた。山王病院（東京都）副院長で呼吸器外科医の奥仲哲弥さん(55)が、がんができる仕組みや治療法について話し、中学2年生や保護者、教職員ら約350人が聴き入った。

奥仲さんは、まず、一生のうち2人に1人はがんになると指摘。一番多いのは胃がんだが、死亡数が最も多いのは肺がんという。

肺がんの主な原因は喫煙で、喫煙者の肺がタールで真っ黒になっている様子をスライドで紹介。たばこの煙には200種類以上の有害物質が含まれ、そのうち40～50種類は発がん物質だと説明した。

一方、肺がんを例に最近の手術法も紹介。さまざまな機器が開発された結果、手術はより短い時間で、大きな傷を残さずにできるようになってきたという。

奥仲さんは「多くのがん

生徒を前に講演する奥仲哲弥さん＝神戸市垂水区の市立塩屋中学校

は早期発見で治せる」と検診の大切さを強調。「健康に関心を持つのはすばらしいこと。話を聞くだけでなく、皆さんで健康について語り合うことが大事」と訴えた。

将来は医療関係の仕事に就きたいという安森ののかさん(13)は「肺がんの死亡率が高いことを初めて知った。たばこを吸うおじいちゃんには、少しずつでいいのでやめてねと伝えたい」と話していた。

講演前には、2年生6クラスの代表が、生活習慣病や飲酒などについて研究した成果を発表した。

携帯・スマートフォン依存について発表した生徒は、視力や学力が下がったり生活のバランスが崩れたりする悪影響を、寸劇を交えて紹介。依存から抜け出すために携帯やスマートフォンを家族に一時的に預けたり、軽いジョギングをしたりといった対応策を提案していた。

「健康について 語り合って」

「あきらめないで」

就職面接 学生に

面接に臨む学生＝神戸市中央区港島中町6丁目

神戸市中央区港島中町6丁目の神戸ポートピアホテルで12日、今春卒業予定の大学生らを対象に就職面接会が開かれた。兵庫労働局やハローワークなどの共催で86社が参加。「卒業前に仕事を決めたい」と約300人の学生が足を運んだ。

兵庫労働局が昨年12月1日に行った県内の大学・短大への聞き取り調査によると、今春卒業する就職希望の学生の内定率は大学生が63・6％（前年同時期比0・9ポイント増）、短大生は52・3％（同10・5ポイント増）だった。

志望する事務職を募集している企業の面接を受けにきたという神戸市の短大2年の女性(20)は、これまで「よく知らないから」などの理由から遠ざけて受けなかった企業もあったが、積極的に就職活動して内定を得たいと話した。

姫路市に住む法学部4年のIT企業を中心に80社あまりに応募したが、内定はまだない。すでに両親が定年退職しており「経済的な負担はかけられない」。この日はIT関連企業など3社の面接を受けた。「既卒になると厳しいので卒業までに就職先を決めたい」。

「語学力を生かしたい」と話す神戸市の私立大経済学部4年の女性(25)は、海外出張のチャンスがある企業の面接を受けた。「同じように就職活動をしている学生たちに流されず、自分の情熱を傾けられる企業にこだわりたい」という。

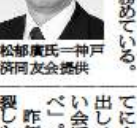
兵庫労働局職業安定課の担当者は、「学生に就職をあきらめてほしくない」と話し、今後も面接会を開くなど支援を続けていく予定。イベント情報は、同局のホームページ（http://hyogo-roudoukyoku.jsite.mhlw.go.jp/）に掲載。（榎本雅希）

新代表幹事に 成松氏を内定

神戸経済同友会

神戸経済同友会は12日、5月で退任する代表幹事の松坂隆廣・神戸土地建物社長(63)の後任に、成松郁廣・川崎重工業相談役(57)を内定したと発表した。5月22日の定時総会で正式に決まる。任期は2年。

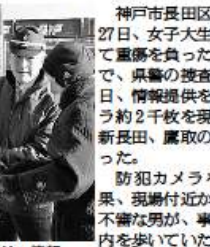
成松氏は愛媛県今治市出身。同会によると、川重で人事畑を歩み、現在は人事本部副本部長。代表幹事は2人で、1人は地元企業から、もう1人は川重や神戸製鋼、三井住友銀行などの大手企業からの起用が慣例だという。現在、地元からは馬場宏之・ダンロップスポーツ会長が務めている。



成松郁廣氏＝神戸経済同友会提供

女子大生刺傷 情報求めビラ

県警



ビラを配り、情報提供を呼びかける警察官＝神戸市須磨区大旭町5丁目

神戸市長田区の路上で先月27日、女子大生(21)が刺されて重傷を負った殺人未遂事件で、県警の捜査員ら27人が12日、情報提供を呼びかけるビラ約2千枚を現場近くのJR新長田、鷹取の2駅周辺で配った。

防犯カメラを解析した結果、現場付近から立ち去った不審な男が、事件後、須磨区内を歩いていたことが判明した。男は身長160～165㌢で中肉、左胸や背中に白っぽいロゴが入ったジャージー上下を着ていたという。捜査関係者によると、男は西方向から現場付近に来て、また西に戻ったとみられる。事件前にも別の女性の後をつけていたといい、無差別的な犯行も視野に調べている。

県警によると、1月27日午後9時半ごろ、神戸市長田区細田町6丁目の路上で、歩いていた女子大生が、後ろから近づいてきた何者かに右脇腹付近を刺された。

情報は長田署（078・578・0110）へ。

がん対策条例 議会に提案へ

神戸市の与党議員ら

神戸市議会の与党会派の議員らが12日、会見を開き、19日開会の2月議会に「神戸市がん対策推進条例（仮称）」を共同で議員提案する、と発表した。市民のがん予防や早期発見への意識を高め、患者・家族への支援を充実させるのが狙い。賛成多数で可決される見込み。

民主・公明・自民神戸・自民の与党4会派と維新所属の計49議員が提案する。

国民の死亡原因の第1位となっているがん。提案議員らによると、神戸市でもがんで亡くなる人は死亡者の約3割を占めるが、検診の受診率は2～4割と低い状態が続いているという。

条例には検診の受診率の向上のほか、がんに関する学校教育の推進、緩和ケアや在宅療養の充実などの項目が盛り込まれている。

275億円補正案 神戸市提案へ

学校耐震化など

神戸市は12日、一般会計と特別・企業会計合わせて総額275億6700万円の2月補正予算案を発表した。国の経済対策に対応し、学校の耐震化や高潮対策など防災・安全対策を前倒しで実施する。19日開会の市議会2月議会に提案する。

主な予算は学校施設改修費として69億2800万円。市立学校の体育館天井の耐震化やトイレの洋式化、空調整備などを実施する。

また、神戸港中突堤周辺が高潮で浸水した際、水をはき出すための排水管を地下に敷設する工事費として10億6600万円を盛り込んだ。

市議選公認候補 共産が4人発表

神戸

共産党東灘・灘・中央地区委員会は12日、2015年春に予定されている神戸市議選の公認候補4人を発表した。

東灘区は現職の松本則子氏(57)と西理氏(38)。灘区も現職の味口俊之氏(44)。市内9区の中で、唯一同党の議席がない中央区は、前回の市議選に立候補した大前雅裕氏(38)が立つ。

同党は1月中旬に開かれた党大会で、15年春の統一地方選の候補者を3月までに選定する方針を決定。神戸市でも残り6区の候補者選定を進め、各地区委員会が順次発表していくという。

みんなの党名派名 「新世代こうべ」に

神戸市議会

みんなの党神戸市会議員団が12日、市議会議長宛てに会派名の変更届を提出し、受理された。新しい会派名は「新世代こうべ」。

昨年末、みんなの党が分裂したことを受け、同会派では所属議員5人のうち1人が、会派は移らず党のみ離党していた。会派名に「みんな」が入っていては一つにまとまりにくいと、会派名を変更したという。

フラッシュ

◆同僚にセクハラ　県立高校の教諭が、同僚に対し、性的な言動を繰り返したとして、県教育委員会から1カ月の業務処分を受けた。教諭はセクハラを認めているという。県教委によると、男性教諭は昨年12月、職場の忘年会の帰りに同僚の男女3人を神戸市内の自宅に招きそうと誘い、一緒に飲んだ。その席、20代の女性講師の女性に対し、家の外に連れ出して抱きついたり、酒に1時間以上にわたって胸を触ったりしたという。3日後、同僚の女性教諭に相談し、発覚した。

◆当直医

◆神戸◆

▼1次（かかりつけ医不在時）▽電話による休日・夜間の救急医療相談案内（848・0099）▽17～翌9時の急患窓口（中央区脇浜海岸通、341・2313）内科（小児）ともに急病電話相談（891・3489）20～翌8時▽小児救急医療相談（☎800・8799＝1回線なし）18時～翌8時▽プッシュホン携帯（7338899＝1回線なし）18時～翌8時▽神戸こども初期急病センター（中央区脇浜海岸通、891・8999）19時半～翌6時半

▼2次（手術入院の必要な重症患者）▽内科（東灘、451・2281）▽神戸西（長田、451・2151）▽野村病院（須磨、731・6471）▽伊

買受 古美術 秦
http://k-hata.web.fc.jp/

眠っている貴金属ジュエリーはありませんか。
日本の貴金属ジュエリー買取
RE:TANAKA

1学年44名の大学受験専門塾
隆盛ゼミナール
RYUSEI SEMINAR

神戸

浜屋

仏壇・墓石直売会
2月15日(土)・16日(日)
神戸サンポーホール
0120-1616-94
お仏壇・お墓のことなら浜屋

神戸総局
神戸市中央区
浪花町60
☎ 078(331)4144
fax 078(331)4149
mail:kobe@asahi.com
明石支局
078(912)0846

購読のお申し込み
配達お問い合わせ
0120-33-0843
(7:00～21:00)

購読・配達のご用は
神　戸　(321)1870
(10:00～17:00　日・祝除く)
明　石078(918)6808
三　木0794(82)9249
広告のご用は
神　戸　(335)1321
折り込み広告は
神　戸　(842)6380

いかに普及を図るか

- がん対策推進基本計画（2期）
  がんの教育・普及啓発
  「子どもに対するがん教育のあり方を検討し、
  健康教育の中でがん教育を推進する」

従来の「ドクタービジット」:
１つの学校（学級） ⇒ 新聞で展開 一定の効果
↓
ただ「良かった、良かった」では発展しない
↓
疑問:「その授業」が、教員にどう映ったか？？
↓ （いずれ自分たちが教える立場に）
今年:見てもらって意見を聞こう ⇔ 協会の活動に反映

学校の先生とディスカッション

◆神戸市教委・第11回教育フォーラム（2014年8月）
分科会の一つで「がん教育」（2時間枠）
アドバイザー：神戸大学病院の腫瘍内科医
（奈良の高校で出前授業の経験）

参加者：幼稚園教員３人、小学教員 １９人
中学教員 ２３人、高校教員　２人
市教育委 １０人、保護者　　１人　他６人
計　６４人

感想（抜粋）

・クラスの子供の母親が乳がんと闘病中。どのようにがん教育を進めればいいか悩む。小学校では、6年の保健学習を大切にし、がんだけでなく、どんな病気やケガ、障害のある人を含めて周りの人を大切にする心を育み、お互いに支え合う温かい社会を目指したい。
・正しい知識をしっかり私たちが学び、子どもたちに伝えていきたい。
・喫煙も20年ほど前は、授業内容や保護者への配慮が必要だった。今は予防教育の必要性や公共の場での分煙などが進み、授業がやりやすくなった。がん教育もこのような流れになって社会全体が変わればいいと思う。
・がん教育について、最近度々耳にしていましたが、どこか他人事のように考えていた。子どもたちに伝えていく役割を担う人間として、多くの関係機関が動いている今、教員ももっと主体的に考えていく必要があると感じた。
・現場ですぐに実践できそうなことをもっと学びたい。

・がんに関する教育の必要性は理解できたと思うが具体的なことはまだまだ難しいと感じた。（誰がいつ、どのように、何を伝えていくのか）。
・がん教育が導入される時に、教員が指導しやすい内容と教材を準備してほしい。教職員への研修、がんに関する知識と指導方法例などしてほしい。

アンケート

2014年7月　島根県江津市の中学校で出前授業
（2年生93人）

「授業の初めと終わり、そして3（実際は4）カ月後」

大きく4項目

１）イメージ　5問

２）知識　　10問

３）授業への期待度・満足度

４）行動

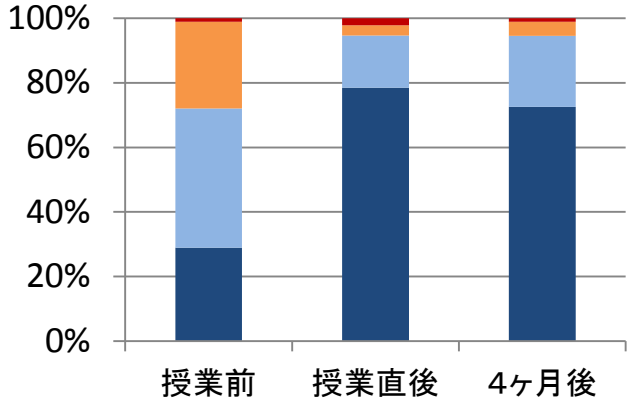
質問は、聖心女子大の植田誠治教授と検討

１）・２）は、3回のアンケートとも同一の内容

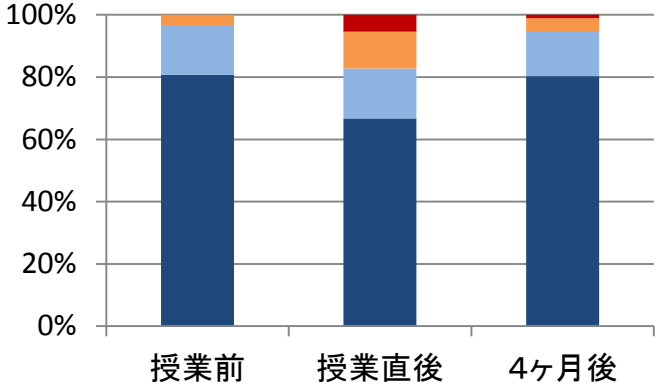
４）について、4カ月後では「行動変容」を尋ねる

アンケート結果（抜粋）
「どんなイメージを持っていますか」

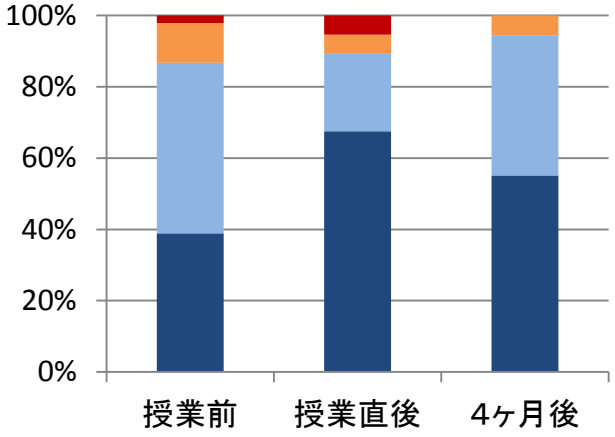
・がんは身近な病気



・がんは怖い病気



・がんになっても早く見つかれば多くの人が治る



そう思わない

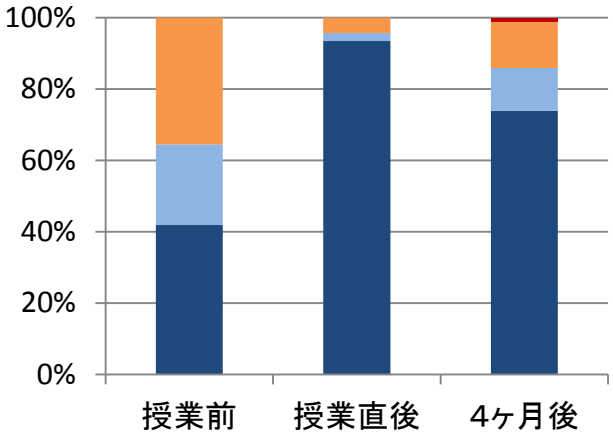
あまりそう思わない

ややそう思う

そう思う

アンケート結果（抜粋）
「次の説明は正しいでしょうか」

・がんは日本人の死因の1位



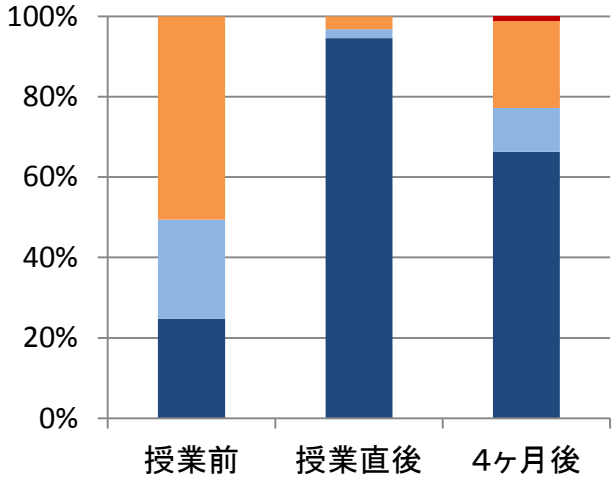
その他（無回答など）

わからない

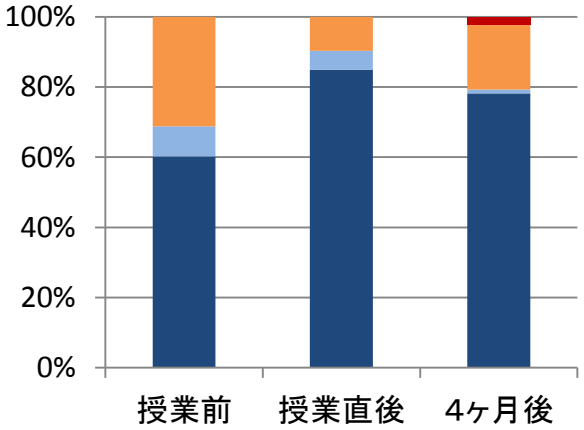
間違い

正しい

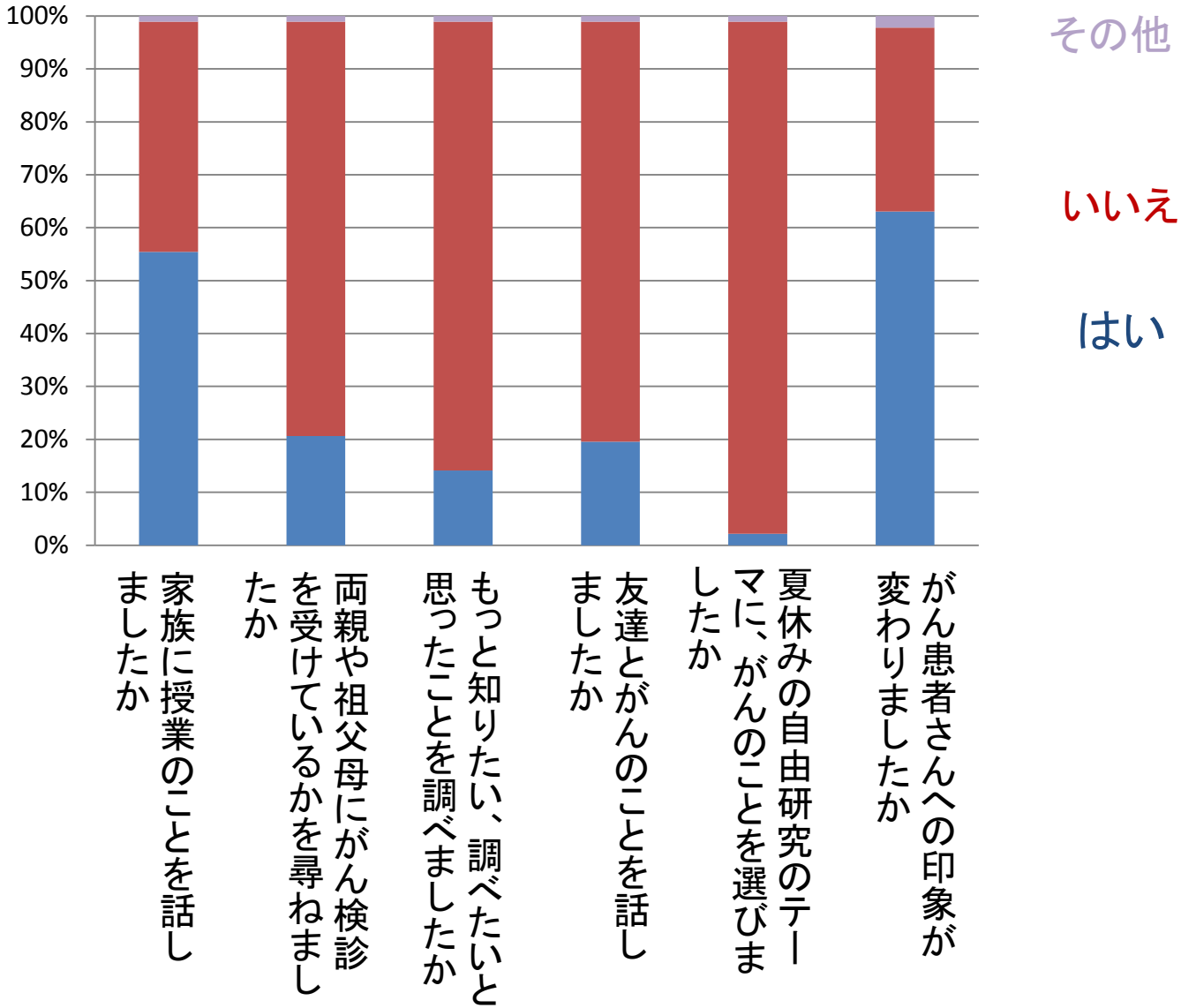
・ほぼ2人に1人はがんを発症



・たばこは周囲の人にも発がんの危険を招く



アンケート結果（4カ月後、抜粋）
「7月にがんの授業を受けた後のことを教えて下さい」



どの学年で、どんな内容を？
４つの観点

- 「学んだことが大切だ、価値がある」
  ＝認識・知識　理解の深まり
- 「もっと知りたい。もっと学びたい」
  ＝関心・意欲の高まり
- 「自ら学べた、自分の考えにつながった」
  ＝主体的な学習
- 「友だちと一緒に学べた」
  ＝価値観の共有

※植田誠治・聖心女子大教授

日本対がん協会の新企画

★「がん教育支援プログラム」＝検討中

DVD「がんって、なに？」「がんちゃんの冒険」

＝現在、作成・修正中

・教員向けの参考的なppt・ガイドブック

・生徒向けのさまざまな小冊子　etc

小児がんの子ども、

親が闘病中・親をがんで亡くした子ども・・・・

多くの方々のご意見・ご支援で作成へ